

小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

8. 最終回 「怪獣たち」との別れ

尾上 明代

セッション終了について

前号まで、A 児童養護施設で行ったドラマセラピー治療セッションについて、開始から約10ヶ月のプロセスを詳述してきた。

その後1年2ヶ月ほど継続し、結局2年実施した時点で終了することになった。実は、もう少し続けるつもりでいたのだが、いろいろな事情が重なり、終了させるを得ない状況で打ち切ることになったので、私としても大変残念であった。また子どもたちにも、終了への心の準備に、ある程度の期間をかけることができなかつたことを申し訳なく思う。(男の子2人がA施設の事情で別の施設に移ることになったのである。それでも何とかA施設でセラピーを続ける方法がないわけではなかったが、助手の浩二さんがすでに施設職員を辞職していること、私が可能な曜日が変わったことなども含めてA施設の考えも聞き、打ち切りを決定したという経緯であった。)

これまでの記述からも理解していただけるように、5人の子どもたちには、感情表現や、仲間と協力して一緒にドラマを創りあげる楽しさを体験してもらうことができたと思う。攻撃的ないじめや過

度な性的言動が表出するドラマが収束していったのと反比例的に、自発性、主体性、表現力、創造力、他者への信頼もかなり育ってきた。終結しても良い時期だったのかもしれない。しかし、施設での暮らしそのものからくる辛さと、いつ親のいる実家に帰ることができるのかわからない不安、よってずっと親から見捨てられた気持ちを感じている、そのような状態が現実的に継続しているわけだから、終結時期を決めるのは難しい問題である。いずれにしても、全員の心身の状態が問題なくなってセッション終了、めでたしめでたし、となるのは無理であるし、今後はちょうど思春期真っ盛りになっていくので、一般的に言っても新たな課題とともにセラピーの必要性も、ずっと続くはずだ。

外的状況のために終わることにはなったが、でもいつかは終了することになるわけだから、逆に2年も続けられて良かったと思うことにしたい。

* * *

A施設のセッションでの手法について

ここで、改めてA施設で行ったドラマ

セラピーの手法のエッセンスを提示しておきたい。特にセッション前半で、観客（他のメンバーたち）の前で、ドラマセラピストと子どもが対一で行う手法は、私が開発した「受容とミラーリングの即興ドラマ」というものである。

この手法の特徴として大変重要なことの一つは、セラピストがディレクターとしてではなく、一緒に演じる共演者という存在だということである。子どもたちと一緒に遊ぶので、プレイセラピーと同じものだと思われる方もいるかもしれない。プレイセラピーの理論や方法論から与えられた恩恵もたくさんあるが、それとの大きな違いの一つは、投影が可能なおもちゃや小道具をほぼ一切使わないことである。この点は、アメリカのドラマセラピスト、David Johnson の開発した「発展的変容」（これもドラマセラピストが自ら演じながらクライアントを導いていく手法）の理論と同じだ。おもちゃを意図的になくして、セラピストとクライアントが出会う。クライアントは、セラピスト以外に遊ぶおもちゃがないので、セラピストが「体現された遊ぶ対象」になり、対人関係に最大限のフォーカスをあてることができる。セラピストと関わるしかない状態におかれるのだ。つまり、クライアントの精神とセラピストの精神が、直接に語り合い、触れ合い、反応し、行きつ戻りつしながら、少しずつ前進していく、まさに「道行（みちゆき）」と言える作業だ。そうしながらセラピストは、クライアントの「感情の補綴（ほてつ）」を提供し（クライアントが今まさに必要としている感情をセラピストが、なり代

わって表現してあげて）、クライアントがその人自身のドラマを創ることに集中する。

A施設では、この方法で一人ずつの子どもたちが、即興ドラマを私と演じることで自発性や創造力を得て、その後の全員で行うドラマもできるようになっていった。そして、ドラマゲーム・個人のドラマ・全員のドラマなどを組み合わせたセッションを積み重ね、繰り返しと相互の **interaction** の中で、さまざまなプロセスが進展した。開始時期と較べて、子どもたちは明らかに自己を自由に表現し、グループで協力をしながら創造的に振る舞うことができるようになった。また施設での他の生活や学校生活でも、より積極的な態度が現れるなど、各子ども個人とグループ全体の成長が見られた。

* * *

前号で記述したセッション以降は、大変うまくドラマができて良いプロセスが進む日もあれば、その反動のように、まったくうまく行かない日もあったりと、でこぼこ道ではあったが、これまでお伝えしてきたように、毎回大騒ぎをしながら、「怪獣たち」と私は、「楽しく苦闘」し合ってきた。

今号では、前号後のプロセスの中で、特に強く印象に残ったドラマと、最終日の様子を紹介し、「小さな怪獣たち」の連載を終わりたいと思う。

我が子を殺すドラマ

前号のセッションからしばらく経った

ある日のこと、いつものように大家族のドラマをすることになり、皆に設定や筋をどうするか聞いた。するとアンズが私に初めて「本当のお母さん役」を指定した。(それまでは必ずいつも「継母役」だった。)アンズは、自分を見捨てた(と間違いなく彼女が感じているであろう)現実の母親を、彼女なりに心の中で受け容れる準備ができつつあることを感じる。このような変化は、アンズが「離婚した母が戻ってくるドラマ」を演じたころから起き始めたように思う。

イチゴたちも、「本当の母親役」には反対しなかったが、でも「世界一怖いお母さん」になってほしいとのこと。理由は、「みんなで反抗するから!」ということだった。

するとリンゴが、「お母さんが、子どもやお父さんをみんな殺して終わるドラマ」を提案した。方法は、銃で撃つというものだった。私は「そのまま終わるの? ハッピーエンドにしようよ」と投げかけてみた。子どもたちは案を出し合い、「みんなが死んで幽霊になって仲直りする」というストーリーで、話がまとまった。

実は、この日の一回前のセッションで、おばけ屋敷ごっこをして遊んだということがあった。(部屋の明かりを消してお化けたちが思い思いのところに隠れ、準備ができると、部屋の外で待っていたお客役が入ってきて順路を歩き、お化けが出て来て脅かすというもの。お化けもお客もとても盛り上がった。特にリンゴはこの遊びをととても楽しんでいた。)「みんな幽霊になって」というリンゴの提案は、その影響もあったかもしれない。

しかしもう一つ、私の頭をよぎったのは、リンゴが実母から「これ以上、一緒に暮らすとあなたを殺してしまいそうだから施設に入ってほしい」と言われたという、以前施設から聞いた報告であった。母親が子どもを殺すということがどのようなものか、ドラマでやってみたかったのだろうか。とにかくもちろん、その筋書きに同意する。私は、後半の「幽霊になって仲直りする」ところが楽しみだった。

ドラマが始まり、私が「世界一怖いお母さん」を演じ始めた。すると子どもたちには、今までで初めてくらいの反抗エネルギーがあり、とてもよく反抗できた!

以前(特に初期のころ)は、反抗できずにいる感じが伝わり、私は相当手加減したが、それが不必要なほどで、大変良い傾向だと思う! しかも蹴ったりする「暴力」もほとんど「まね」だけでできるようになった。私を実際に蹴らずに「蹴るふり」なのだが、(イチゴとマツオは特に)とてもたくさんの負の感情を表現し、吐き出しているのが母親役を演じる中で実感としてよく伝わってくる。

そもそも、考えてみてほしい。つらい体験をもつ施設の子どもたちが、「自分たちが、怖い母親に怒られ殺される場面をやってほしい」とリクエストし、セラピストがそれを快諾して、そのようなドラマを演じている状況を。この連載の読者の方々は、今となっては特段の違和感もなく理解して頂けていると思うが、もし初めにここだけ読んだ方がいるとすれば、

かなり首をかしげるのではないだろうか・・・！

私が「怖さの演技」を手加減する必要がなくなったという意味を、別な言い方で説明するならば、この場が、「架空のドラマ、遊び空間」として、しっかり機能するレベルが大変高くなったということである。子どもたちが、そのことを了解している度合いが進めば進むほど、どんなドラマも可能になるし、危険ではなくなる。そしてクライアントが多くの負のエネルギーを解放することが、より可能になっているのに、しかも、より楽しく安全にそれができるといえることが起きる。今のドラマは、まさにそのようなレベルに到達したことを示している。

David Johnson は、次のように説明する。「クライアントが遊ぶ（演じる）ことが不可能な問題(the unplayable)を、遊べる（演じられる）ようになることが、セラピーのゴールである。なぜなら、この遊べない（演じられない）ものこそが（内面に潜んでいて）、私たちの源から私たちを妨げているからだ。そのブロックをはずすためには、ネガティブな問題を遊べるようにならなければいけない。そのようなプロセスは、多くの場合、繰り返しの途中で可能になっていく。」

つまり、初期のころから、子どもたちが加害者の役に同一化するドラマが頻繁に演じられるというプロセスが進み、少しずつ、被害者(弱い立場の役)を慰める役、加害者を赦す役などが、出現してきていた。そして、「子どもが怖い親に怒られ殺される」ドラマは、(5人のプロセスの進化は均一ではないものの)自分たちがい

じめられるという題材が、子どもたちにとってかなり「遊べるもの」になったということを示している。これは、今までの行きつ戻りつの繰り返しのドラマプロセスが可能にしたことだと断言できる。(男子2人のプロセスの進化度合いは少し違っていたが、これについては、後述する。)

以上のことを、異なった視点から次のようにも言えるだろう。中村雄二郎は、様々な感覚のなかで、身体的であれ、精神的であれ、痛みこそ全身にもっとも影響を与えるのだと言う。彼は「共通感覚論」の中で、個人の諸感覚を統合されるといわれる共通感覚を通して、痛みは全身の感覚に影響を与え、また身体・精神の統合に影響を与えること、逆にその感覚こそ、他者と最もよく共有され、他者によりよくつながることのできる源となり得ることを解説している。

つまり、深く強い痛みを持っている彼らこそ、その痛みと対峙し、理解できるようになれば、他者と共振する感情をより一層強く持てる可能性があると思う。加害者の役から被害者の役への転換、そしてその痛みを楽しみながら対象化できるようになるのは、その意味でとても大きな転換点である。

マツオとスギオの大きな進化

さて、ドラマが進み、とうとう私が子どもを殺すくだりになったとき、アンズとイチゴがストーリーに反対して、新たなアイデアが出される。「母親が殺した、と思い込んだだけで、実は子どもたちは生きている。皆は死んだふりをしていた

だけ」というものであった。当初のストーリーを提案したリングも反対しなかったの、そのように変更された。その後の筋書きやハッピーエンドも詳しく決まった。いずれにしても、ハッピーエンドは私も当初から創りたかったの、大歓迎だ。このように高まった彼らの自発性、創造性を非常に好ましく思う。

いよいよ私が銃で子どもたちや夫を殺し、皆は予定通り「死んだ」。実は、このとき（またその前の、筋書きを皆で決めているときも）マツオとスギオの2人はどちらかという、嫌そうだった。彼らはまだ被害者の役は受け入れられないのだろう。でも全員の望みを聞くことは不可能だ。

ところが、面白いことが起きた。マツオとスギオは、殺された直後、突然2人で起き上がって（打ち合わせもなしで！）TVレポーターに成り変わり、マイクをもって「事件」レポートをし始めたのだ。まさに、そこで起きていることから距離をとり、客観的立場で、その場の状況を語るという選択をしたのだ。その後、マツオレポーターは、テレビ局のスタジオに戻り、ニュースキャスター席からカメラに向かって続きを話す。スギオは、（生放送のニュース番組によくいる）ディレクターとしてマツオの隣に座って指示を出す。アイデアもさることながら、演技としてもなかなか上手く、当然、他のメンバーみんなにとってもウケた。

さて現場で死んだふりをしていた家族たちは、母親がその場を立ち去ったあと、打ち合わせ通りこっそり起き上がる。このとき、テレビ局の男子2人はさっと「子

ども」に戻った。そして皆で警察に行く。

その後すぐ現場に戻ってきた母親はと言えば、死んでいるはずの皆がいないので大変驚き、母親も警察に行く。そこで皆が会って仲直りをし、東京ディズニーランドに行った。TDLではジェットコースターに乗って（実際に長机に乗る）ハッピーエンドというドラマであった。

マツオとスギオがレポーター役を咄嗟に自発的に行ったことは、驚愕と感動に値する。なかなか「遊べない問題」を、まさにドラマの中で自ら別の役や状況を創って、自他ともにとっても楽しいやり方で「遊べる」ように創りかえて対処したのだ。自発性を発揮して複数の役に入ったり出たりして創造的に癒されていく方向に向かったことは、非常に高く評価できた。

上述したように、女の子3人は、殺される（つまり被害者になる）役は、しっかりできるようになっていた。このことは、3人が連続セッションのプロセスを良く進み、攻撃者とだけ同一化していた役をやることから抜けだし、自分自身を弱い被害者として勇気をもって認め受け容れることや、攻撃者を赦して受け容れることができてきたということでもあろう。「子どもたちは実は死んではいなかった（母親を殺人犯にしなかった）、そして警察で会って仲直りする」という筋書きは、まさに攻撃者を赦し受け容れたのちの家族再生のドラマであると、私には思えた。）

また、前号までに記述した通り、それぞれの女の子と私との信頼関係がきちん

とできていたことが、そのまま反映されている。一方、男の子2人は、彼らの即興ドラマの技術とプロセスが、まだ女の子ほど進んでいなかったこと、(これと並行して私との信頼関係のレベルが、女の子ほどではなかったこと)がそのまま現れており、まだどうしても被害者の役になりたくなかったことが見てとれる。マツオとスギオは、もともとドラマ表現に照れる傾向があること、2人は大の仲良しなので、セッション中も、何かと気分が一緒、物理的にも一緒にいたので、1人ずつと私が心を通わせるチャンスが少なかったことも理由としてあげられる。

しかし、とても素晴らしいことは、彼らがここで(無意識に被害者の役をやりたくなかったとき)、たとえば突然加害者の役になるとか、ドラマ参加をやめてしまうのではなくて(そのようなことは、充分起こりうることだったのにもかかわらず)、突然、テレビレポーターになったことである。この行動により、自分たちは、嫌な役に留まっている必要はなくなり、また突然ドラマ参加をやめることでその場を壊してしまうこともなく、ドラマは続行できたのだ。しかも、ドラマ全体としても、とても良いアイデアでバラエティーに飛んだ楽しい展開を出現させたのである。

この2人が二年間に演じた即興ドラマの中で、私が一番印象に残るものであった。

* * *

最後のセッション

さて、最終日が訪れた。セッション開始時、女の子3人は、ドラマセラピーが終わることをとても残念がってはいたものの、事情を理解し、受け入れ、私と和やかに話をする事ができた。しかし男の子2人の雰囲気は、荒れていた。セッションが終わることだけでなく、そもそも急に別の施設に行くことになったことが、つらいのだ。

セッションは、いつもと同じ構造にし、中心部分は二年間のプロセスを振り返るべく、床屋や家族のドラマを試みたが、うまく行かなかった。スギオが言うことを聞かず、ボールを持ち込みマツオとサッカーをしていて、柱に掛かっていた大きな時計に「間違っ」ボールが当たってしまった。

ガッシャーーン！！

ものすごい音とともに、ガラスが飛び散った。スギオの気持ちを本当にピタリこの時計が表現してくれた。幸い、誰にも怪我はなかった。普段、もしこのようなことが起きたとすれば、他の子どもたちから、悪戯をした子どもへ大変なブーイングが起きるのだが、このときは誰からもそのような発言はなかった。少しだけ、「あーあ」という、やっちゃったーという気分の声が女子から漏れただけで、あとは全員一丸となって黙々と協力して後始末をした。彼らを誇りに思えた。

最後のいつもの歌の時間に、プレイヤーの前に来て一緒に歌ったのは3人の女の子たちだけだった。

この後、全員ですぐ近くのファミリーレストランに行ってデザートを食べることになっていた。あとにも先にもたった

一度の「家族全員のお出かけ」である。セラピーの終了が決まったとき、私が施設に特別の許可を得てあったのだ。

皆はオーダーを決めるのに大変悩み、時間がかかったが、それも含めてこの家族メンバーでのデザートタイムを大騒ぎで楽しんできた。

これから、彼らにどんな人生が待っているのだろうか。二年間のドラマセラピーの思い出を目に見える形で残したいと思う。ルネ・エムナーも、「連続治療セッションが終わるときは、クライアントたちに写真などの具体的な思い出の品を渡すことは、別れに伴う痛みを和らげるし、未来において治療体験の記憶が薄れる頃に困難に直面したとき、その人を支えてくれるかも知れない。特に子どもの場合は、そのようなものが必要だ。その子どもたちが、人生の中で多くの別れを堪え忍んできており、何かの終わりというものに直面するのに困難を感じる可能性がある場合にはさらにそうである。」と述べている。私は、前回撮った皆の写真をアルバムにし、1人ずつに手紙と共に渡した。リンゴがとても気に入っていた私のシャーペン（安価なものだが、キラキラ光る素材でできていたことから、彼女は大変羨ましがっていた。）も5本購入してあり、皆への記念品とした。

このパーティーと記念品贈呈を、プロセス最後の第五段階（ルネ・エムナーが提唱する「ドラマ的儀式」）とし、ついにこのグループは終結した。

別れ

私は車で女子3人をA施設に送り届け

た。穏やかにことばを交わし、3人とお別れの握手をしたあの夜のシーンを、何年もたった今でもはっきりと覚えている。スギオは1人で自転車に乗り新しい施設に帰った。最後にマツオを新しい施設に送る。車のドアを開けて降りたら、マツオは私を振り返りもせず、玄関へ向けて走って行くので、「マツオ君、握手！」と呼びかけると、すぐに戻ってきて、私の手をバチン！とぶって行った。私の顔も見ないで。

* * *

終わりに

当時、二年前に出発した7人乗りの船・・・5人の小さな怪獣たちを乗せた船は、どこに行き着いたのか。決まった目的地があって出帆したわけではないが、これまでいろいろな場所を皆で巡り旅してきて、とりあえず一つの港に到着したことには違いない。

これからは、この7人で旅に出ることは、二度とない。それぞれが、旅の思い出をどこかにしまい、今後のそれぞれの旅の中で、そのかけらを思い出してくれればと願う。私にとっては、「ドラマを通して」格闘しながら彼らの「すべて」と全身全霊で関わった日々であり、さまざまな思いのつまった旅路であった。この船と一緒に乗り続けてくれた浩二さん、そして小さな怪獣たちとともにこのような旅ができたことを、船頭として心から感謝したい。

創作力と演技力をたっぷり発揮したドラマをきっかけに、攻撃性がほとんど消

滅していったイチゴ。強迫的にも思える性的な言動が一番強かったアングスの収束傾向と反比例するように起きた、彼女の積極的なドラマ参加と感情表現の高まり。初めは口もきいてくれなかった彼女と創れた信頼関係。リンゴの自己開示をきっかけに結べた、より確かなコミュニケーションの絆。ドラマでの表現も、また私が近づくのも一番難しかったマツオとスギオの自発性と創造力の高まり。確かに、このような変容が実現できた。しかし、今思い返せば、もっとこうすれば良かった、あんなことも試せたのではないか、などなど悔いもたくさん残っている。

彼らの生育歴や、施設での状況を考えると、感情表現、他者との協力、想像力、創造力を開発することが、どれほど重要なことかは、強調しすぎることはない。この連続セッションが、彼らの成長の糧として、少しでも役立っていくことを期待したい。

* * *

私は最初、5人の「中」にいる「怪獣たち」をなだめようと格闘していたように思う。しかし、怪獣たちは、「中」にはいなかった。子どもたちは、「怪獣」の着ぐるみを着ていたのである。誰でも必要なとき、必要な場所では、そのような着ぐるみを着ざるを得ないのだ。着ぐるみを脱いだ彼らの「中」にいたのは、自分が選択したのではない環境に、傷つき、恐れ、これから様々に成長する可能性をもつ子どもたちであった。

この旅の「終着港」として、デザート

を食べた、あのファミレスをこの先一生思い出すことだろう。そしてガッシュャーンと落ちた大きな時計と、最後に私の手をぶったマツオの手を。

(完)

文献

- 1 James, M. Forrester, A. M. & Kim, K.C. (2005). Developmental Transformations in the Treatment of Sexually Abused Children. In Haen, C. & Weber, A. M. (Eds), Clinical Applications of Drama Therapy in Child and Adolescent Treatment (pp.67-86). Taylor & Francis Group.
- 2 Johnson, D.R. & Emunah, R. (eds.). (2009). Current Approaches in Drama Therapy. C.C.Thomas.
- 3 Lewis, P. & Johnson, D.R. (eds.). (2000). Current Approaches in Drama Therapy. C.C.Thomas.
- 4 中村雄二郎、(2000) 共通感覚論、岩波現代文庫
- 5 ルネ・エムナー、尾上明代訳 (2007)、ドラマセラピーのプロセス・技法・上演、北大路書房